

『パリ燃ゆ』に学ぶ

「蝶の雑記帳 136」

自分の思索を二三の書物に書きとめるという分不相応なことをしてきたが、日本古代史について再検討・集大成して最後の書物にするという欲が出て、去年はその作業に明け暮れた。年が明けてそれも終了し、今年はもっと腰を落ち着けて生活したいと思った。暮れに読んだ『山本義隆自選論集Ⅰ』に二度大佛次郎の『パリ燃ゆ』がものすごくおもしろいと書いてあるのに誘われて、読みたい本があまり出版されないときでもあるし読んでみようと思い立った。

その本がおもしろいだろうということは、『天皇の世紀』を読んでいたので前から判っていたことである。ただ、わたしには読んでいない名著がたくさんあって、『天皇の世紀』ほどでないとしても大部の『パリ燃ゆ』を読む機会を見つけられなかったのである。早春には八十になろうとしているのだから、読めるとすれば今だろう。インターネットで探したら、選書や新装版や文庫版など幾種かの書籍になっているが、選書のペーパーバック以外はみな中古本。わたしは安い値段のついた初版本を選んだ。届いた本の奥付には 1964 年第 1 刷とある。うれしいことだ。折込の手の込んだ表紙は茶色に変色し、本文の紙も上等の用紙ではないようで古びている。大佛次郎が父親に『天皇の世紀』を『太平記』に喩えたと聞くけれども、フランス近代の劇的な歴史を物語るこの古書はそういう古典の雰囲気を湛えている。一つのページが上下二

段組で、上下巻合わせて 954 ページ。これは読むのに楽しみだ。だがわたしには、鉛筆で傍線を引く悪癖がある。

『パリ燃ゆ』で大佛は、1871 年のパリ・コミューンを、ルイ・ボナパルトの 1851 年のクー・デターから語り始める。皇帝ナポレオン三世の支配が引き起こした歴史的出来事として描写するのである。パリ・コミューンを、いくつかの転機のあるひとつながりの全体として捉え、しかも、それぞれの時期に密接に関連して次々に展開する出来事の経緯を具体的に記述する。そのやり方は成功して、臨場感あふれた描写がめまぐるしく続き、次はどうなるのか、読者はどんどん引き込まれていく。このとても長い物語がおもしろいという感想を引き起こす一番の理由はそこにある。

しかし、大佛という人は単に語りの巧みな作家ではない。この作品は、大河小説とはまるで異なるノンフィクションである。歴史の襞に分け入り、なぜそのような出来事が起きたかまで考えて明らかにしようとする。歴史の場面場面を物語のように記述するのだが、通常の歴史書とは異なってしかも歴史の著作に高められている。重要な歴史的事象において、出来事と同時にそれを担った人々が現実的な生きた人間として立ち現われる。

登場する人物は簡略に社会的・階級的な位置が説明されていて、たいてい言動がその社会的な位置と関係していることが見て取れる。人々が渡り合う一つひとつの出来事で、小説

では描写が困難な社会的な人間関係まで書きこまれている。それはまた、通常の歴史の記述では抜け落ちがちな歴史的な人物の人格を、小説とは異なるやり方で浮かび上がらせる。こういうことが、このノンフィクションの優れた特徴だ、とわたしは思う。ここでは、歴史を単に知識として受けとめるのではなく、こういう場合にわたしならどういうふうに言動するだろうかと反省を促される。今ある自分の姿勢を正すように求められる。

Wikipediaによれば、大佛次郎は、東京大学法学部政治学科を卒業後、鎌倉高等女学校の教師となり国語と歴史を教え、外務省条約局の嘱託となって翻訳の仕事に就いたが、ほどなく教師を辞め、本好きが嵩じて作家になった、という。初期のこの経歴は、大佛次郎という作家が本性的に自由人だったことを示している。たくさんのペンネームは思考がさまざまなことに及んだことをうかがわせる。

『敗戦日記』と『南方ノート・戦後日記』を読んでも、渡辺一夫の『敗戦日記』ほどの危機感は現われていず、政治的には中庸な立場だったと見える。しかし大学時代、吉野作蔵が右翼から攻撃された「浪人会事件」では吉野の応援に駆けつけたというから、政治学科に学んで卓越した読書家だったこの人の心中には政治・社会的な問題意識があった、と考えるべきなのだ。善良で公正な人柄と見える「鞍馬天狗」が、時代の変化を受け入れるこの人の立ち位置を示しているだ

ろう。

白状すればこの人の小説を読んでいないのだが、戦後の小説の作風は変化し、「心境小説的な要素がいちじるしく加わって来ている」と評されているそうだ。外国で翻訳された作品『帰郷』に対して、雑誌が「戦後の日本の他に類例の無い生活風景描写の中で、この小説は人間の淋しさ、愛情、恐怖、および食欲の普遍性を扱っている」と評したそうだ。

もともと社会と人間に対する大佛次郎の見方は狭いものではなく、優れた知力が、世の中の移り変わりを観て経験を積み学習を深めるうちに、『パリ燃ゆ』や『天皇の世紀』のような広くて深い大作を生み出すことになったのだ。晩年になっても政治的な発言はなかったようだが、『パリ燃ゆ』にとりかかるころ、第1回科学者京都会議に出席して核実験停止・軍縮・平和運動に加わったことは、この人の思想に大きな変化が起きていたことを示しているだろう。『パリ燃ゆ』の文章がその思想を表現している、とわたしは思う。

＊

この分節の意図は、『パリ燃ゆ』が記述する内容のうち、当時のフランスとパリの社会と政治を少しでもよく理解したいということにある。

『パリ燃ゆ』は、ナポレオン三世が支配を始めてからその体制が崩壊するまでの四半世紀を起伏あるものとして物語

る。その 1848 年～1871 年の四半世紀は、フランス革命から 19 世紀末まで百年余の激動の歴史のなかの不可分の一時期である。単なるフランス通以上の大佛は、1789 年の大革命から 1800 年代末のドレフュス事件までのフランスのことをよく知っていて（『ドレフュス事件』はすでに 1930 年に書かれている）、『パリ燃ゆ』を書き始めた。

パリ・コミューンのことは、その百年の歴史のなかに置いて観てはじめてよく理解できる。その時代のことをわずかにしか知らないわたしは、二三年前に P. マクフィー著『フランス革命史』を読んだが、歳には勝てずすでに記憶が薄れ始めている。ナポレオン一世のあとの時代のことは粗筋しか知らない。ブルボン朝復古王政とそれを倒した 1830 年の七月革命のことも、続くブルボン朝支流ルイ・フィリップの王政とそれを倒して第二共和制をもたらした 1848 年の二月革命のこともよく知らない。1848 年にはヨーロッパ中で革命が起きたのだが、フランスの動揺は激しいものだった。

上の段落の文も、Wikipedia で確認して書けたことである。Wikipedia は、1789 年の大革命と 1830 年の七月革命がブルジョワジー主体の市民革命だったのに対し、1848 年のフランスではプロレタリアート主体の革命運動へと転化した、と書く。さらに、——1848 年六月にはパリの民衆が蜂起して市街にバリケードを築いたのを、軍隊が出動して次々に粉碎した。バリケードにこもった労働者と民衆は容赦なく殺され、2 万 5 千人が逮捕されて反乱は終息した。最終的に死者は政

府側 703 名、労働者側 3035 名に及んだ。容疑者狩りが執拗に行われ、疑わしいとされ政治犯となった労働者が捕縛され、まともな裁判も受けられずにアルジェリアに追放された……と。それを読むと、『パリ燃ゆ』が記述する一連の出来事がフランスとパリの前史をなぞるかのように拡大再現されたものということが判る。『パリ燃ゆ』に出てくるブランキなどは、1848 年二月革命のころから社会の変革をめざした闘士だったのだ。

上のように予習すると、『パリ燃ゆ』が語る出来事の社会・政治史がよく見えてくる。けれども、それを全体的に整理してまとめるのはわたしの手に余る。大佛次郎が浮かび上がらせることの概略なりでも自分なりに書いてみよう。

歴史家がナポレオン三世と政府がプロシヤ(プロイセン)の挑発に乗って始めたとする普仏戦争での敗北は、昔のよその国の国難だから悲喜劇のように見える。皇帝率いる主力軍が攻囲されて脱出しようとしたナポレオン三世が捕虜になると、政治家・軍人の態度は一変し共和派が主導権を握る。それはブルジョアつまり上層階級であった。プロシヤ軍がさらに進撃しパリの隣のヴェルサイユに本営を置く終盤戦になると、包囲されて籠城することになった首都パリはいよいよ深刻な危機に陥った。敗戦のなかで一部の愛国的な軍が抵抗を示したものの、帝国の将軍たちは保身が第一で有効な防衛戦を行なわない。『パリ燃ゆ』は、困難な祖国防衛戦を戦う

意欲のないブルジョア政治家と軍隊が降伏を受け入れていく悲しい過程を、これでもかこれでもかというほど詳細に描き出す。日本の太平洋戦争のことを想起すると、これをおもしろいと言うことはできない。大佛はそういう思いでそれを書いたのだろう。

その間包囲されたパリが受けた圧迫は、いつの時代もそうだが下層の民衆ほどつらいものだった。そういう情勢下、ブルジョア政治家と軍隊はプロシヤの要求する降伏条件を受けいれ（アルザス・ロレーヌを割譲させられる）、1871年、普通選挙によって国民会議が成立する。それはのちに第三共和制と呼ばれるものになるが、復古王政、ルイ・フィリップの王政、1830年の七月革命と1848年の二月革命・六月蜂起の経緯と帰趨が教えるように、ブルジョアと地主層が主体の体制であった。

最初それを指導したのが、『パリ燃ゆ』で重要な役回りを演じるティエールである。すでにルイ・フィリップの王政で名をなした政治家だったが、1848年の二月革命からは共和派に転身していた。経験を積んだこの政治家が1871年の国民会議で指導者の地位を勝ちとることになる。

戦争中敗戦の危機に直面したフランスは、防衛軍を補強するために市民に小銃・弾薬を配布して、正規の軍隊に加えて国民軍を組織した。敗戦となったとき、市民は武装していたのである。この状態は、1830年の七月革命と1848年の二月

革命・六月蜂起を経験した保守派の権力には脅威であった。敗戦から休戦へ向かうなかで、プロシヤ軍がまだ首都城壁の東郊にいた状況下、パリの民衆の反抗がプロシヤとの和平を壊すことを恐れて、軍隊はパリ市中にあった大砲を接収しようとして出動する。

このとき首都パリには各区に国民軍の大隊があったが、その隊長と兵士たちは、裕福な地区を除けば、パリの民衆と呼べる人たちだった。そして、各区の大隊を代表する委員が出て、パリ市全体の国民軍を連結する中央委員会が組織されていた。中央委員会の委員たちは、正規の軍隊がパリ市の国民軍のものと言える大砲を接収することが自分たちへの抑圧となるだろうことを、歴史から学んで本能的に知っていた。だから、パリの国民軍の兵士たちは、自然発生的な行動によって大砲の持ち去りを阻止した。状況は一気に軍隊とパリの民衆との対決の様相になる。

一触即発と見てとったティエールは自らヴェルサイユへ退避して、国民会議の政府をそちらへ移す。軍隊もパリからそちらへ退却する。ティエールは老練な戦略家だったのだ。この退却は保守派の政府にとって危険なものだったが、民衆派のパリ国民軍中央委員会は戦略を学んだことがない。退却する軍隊を追撃すれば勝機があったけれども、それをすべきであることに気づかない。『パリ燃ゆ』で大佛は何度もパリの民衆側に勝機があったことを指摘して、主人公として語られる民衆側に同情する読者を歯ざしりさせる。

パリ市各区の役人は自分たちの行政権を護ろうとするが、ほぼ結束してことに当たろうとする国民軍の中央委員会の実力押し切られる。中央委員会は律儀であった。パリ市で選挙をして市議会を成立させて市の政府を立ち上げ、中央委員会が一時的に執行する権力をその市政府に譲るとした。実際に選挙が行なわれてそのようになる。市政府の議員になったのは、新聞記者など雑多な共和派の人々で無産階級の労働者も含まれていた。無産階級の労働者といっても、1870年代にもまだ植字工や本屋の店員など職人と呼べるような資質の人たちが大半であった。

大佛次郎の筆致は、市政を担ったこれらの市井の人々がおおむね無私で善良で公正だったと教える。退却する政府軍を追撃しなかったのは失敗だった上に、フランス銀行を接収して市政府が独占的にそのお金を運用することも可能だったのにそうしなかった。大佛は、そのお金で將軍たちを買収することもできただろう、と指摘する。

老練なティエールは、諸地方へパリの市政府について悪意をもって虚偽の情報を伝えて地方がパリに敵対するように誘導し、ヴェルサイユに軍隊を集める。さらに、敵だったプロシヤに抑留されていた十万単位 of フランスの將兵を返してもらい（敵国プロシヤの首相ビスマルクは、1948年のようにパリ民衆の反抗が自国を含めヨーロッパ諸国の革命的気運に火をつけることを恐れて、ヴェルサイユの政府に協力し

たのである)。そうなったとき、ティエールの戦略は成功し、ヴェルサイユの政府とパリの民衆との戦いの勝敗はあらかじめ決したのである。パリの裕福な地区の国民軍の大隊は、下層市民を主体とするパリの防衛軍に加わらない。

* *

歴史について説明的な文章になってしまった。そういうことを書きつらねてもあまり意味はないだろう。ここからは、わたしが抱く感慨めいたことを記そう。

普仏戦争での敗北・パリ籠城で最も苦しい目に合ったのは、下層階級なかでもフランス人がプロレタリアートと呼ぶ無産階級であった。負け戦でパリ市中の庶民の仕事が停止状態になって、国民軍の兵士になって一日わずかの日当をもらってかつかつの生活に耐えたのはそういう人々であった。犬や動物園の獣を食べるような状態になったとき、パンさえも十分に手に入らないようになったのが庶民であったことは想像にかたくない。『パリ燃ゆ』はそのことを書きもらさない。民衆がより素朴に祖国防衛戦に耐えていたとき、ブルジョア勢力は、パリ市民に防衛戦争を煽り立てながら実際には本気で戦闘する気が無かったことを、『パリ燃ゆ』は綿々とつづる。読む者がその欺瞞に歯ざしりするほど。

休戦になって国民会議の議員選挙が実施され、ブルジョア勢力の代表として新たな政府首班になったティエールの目

的は、降伏して早く戦争を終わらせることであった。煽り立てた民衆が窮乏にもかかわらずまだ祖国防衛戦争の継続を望むことを憎み、民衆が反抗することを最も恐れた。パリに置かれていた大砲を正規軍が接収しに行ったのはそのためであった。そのとき、パリの民衆は裏切られたことを知ったのだ。パリ市の国民兵の中央委員会がそれを阻止するのは当然の成り行きだった。

すると、ティエールはヴェルサイユに逃げて、軍隊もそれに続いた。国民議会の政府とその軍隊は、まだ戦争が終わったわけではなくドイツ軍がまだパリ市の東郊にいるのに、パリ防衛を放棄したかのようなふるまいである。ティエールの敵は、ドイツ軍ではなく、パリ市でドイツ軍に対して籠城を続けようとするパリの民衆であった。

普仏戦争と呼ぶが、プロシャ＝プロイセン側にはバイエルンなどドイツ西南部の諸邦の軍も参加していた。戦勝は、プロイセンを盟主としてドイツ諸邦を統合させ、ドイツ帝国が成立する。ヴェルサイユにいたプロイセン王ウィルヘルム1世は、敵国フランスのその宮殿でドイツ皇帝に即位した。

このとき、フランス社会の階級構造は最も鮮明になった。パリの下層民衆は、自分たちの社会的な立ち位置を骨身にしみて知ったわけである。国民議会の政府と軍隊に見捨てられたパリ市民は、選挙を行なって市議会議員を選出した。裕福な市民はこの選挙に積極的にかかわることをせず、できた市

民政府は、自ずと下層の民衆と共和派の市民が主導することになった。それがパリ・コミューンである。政治について素人に近い人々の政府が、状況に導かれてヴェルサイユの国民政府と軍隊との戦争に立ち向かう。同時に、パリ市民のための行政も執り行われなければならない。打倒されるまでの期間は二か月余りしかなかったが、大変困難な事業であった。それまで無名だった人々がその大変な役目を果たした。

パリ・コミューンは、たくさんあった大砲を十分に活用することもなく、パリの城壁の外の堡壘を失っていき、結局、最後の日々は、入城してきた正規軍に対して市街の道を舗道の敷石や利用できる周囲の資材を用いたバリケードで封鎖する。そこでも大砲はあまり活躍せずおもに小銃で戦うことになる。1848年の六月蜂起の四日間にくらべれば、パリ・コミューンは2か月余りもったけれども、さらに悲慘な血みどろの抵抗戦だった。大佛は、殺された人の数は2万を超えるだろうと考えている。

『パリ燃ゆ』は、その日々の戦いでの市政府の人々の働きを、可能なかぎり一人一人について語る。普段政治的な発言をしなかった大佛次郎の文章は、無名であったその人々に対する深い共感と同情を表わしている。『パリ燃ゆ』を書き始めた1961年ころ、この人の社会観が大きく変化したのだとわたしには見える。歴史における被圧迫者たちへの同情が深まり、また、人間という者の未熟さを諦観をもってとらえる歴史観に変化していった、と見える。その人間観はそれより

も前に書いた小説『帰郷』にすでに現われていた、と考えることができる。だから、外国の書評家が「その小説は人間の淋しさ、愛情、恐怖、および食欲の普遍性を扱っている」と評したのだろう。

1871年のパリ・コミューンは、大革命以来のフランスの社会と政治のあり方を再度復習して総括する歴史上大きな転換点であった。下層の民衆による政治革命は未遂に終わり、それ以後今日まで続く政治体制——投票によって国民議会の代議員を選出する自由・民主主義と呼ばれる制度に基づく体制——が確立した。多数を占める無産者と下層の民衆は、より少数の経済的に優位な階級に従属することになった。つまり、(それまでの貴族や僧侶などの身分の者たちは後退し)、経済活動で優位となりフランス人がブルジョアと呼ぶいわゆる中産階級の人々が自由民主主義の体制を主導することになった。人間の社会で生計を支えるのは経済活動で、社会のなかでの地位は経済上の優劣によって左右されるからである。選挙という方法はその経済的な力を揺るがすことができない。

われわれは人類の文明が進歩したと思っている。けれども、21世紀になっても、生物種としての人間は進化しておらず、未熟さを克服できていない。人間の社会は現代も諸問題をかかえたままで、政治上であいも変わらぬ騒動を引き起こしている。現代は、パリ・コミューン後に各国に敷かれた政治体

制がかかえる社会の諸問題を引きずっているのである。そして、昨日も今日も、それらの諸問題を解決できないでいることを目の当たりにしている。

この二か月、アメリカ合州国の大統領選挙で当選した人物が、世界中の暮らしを揺さぶるような政策を実施しようとしている。クー・デターで皇帝になった人物はまだしもサン＝シモン的な思想に染まっていたけれども、現代アメリカの“皇帝”であろうと欲する男は常識はずれである。先日のニュースが、協定を結ぶために来たウクライナ大統領との顔合わせ中、記者団が見守る前で頬を赤らめるほどの口論を始め、ウクライナ大統領が協定締結もせずに立ち去る事件が起きた、と報じた。ホワイトハウスからの退去は米国側が促したらしい。ロシアとウクライナの戦争が無難に停戦になるか心配である。

この戦争は本質的にアメリカとロシアの戦争だという E. トッドの見解が半ば当たっていることを、今度の米国大統領が明かす。ロシアの大統領と直接会って、ウクライナの頭越しに停戦協定を結ぼうとしている。そういう政治交渉は、不動産王としてかなりのブルジョアである人物の経済的な取引の延長上のものところがわない。前回の「蝶の雑記帳 135」で考えた「西洋社会のほころび」と「アメリカ社会の退廃」が現実の政治行動に現われているのだ・・・。

* * *

今日の状況を見れば、フランスの革命がスローガンにした「自由・平等・博愛」が本当に実現したことはなかった、と考えざるをえない。

『パリ燃ゆ』下巻の終わり近く 414 ページに、「ルイズ・ミッシェルは、自分がアナーキストになったのは流刑になってニューカレドニアに行く航海中だった」と述べたと記す。バリケードで二三人になるまで戦った女性闘士ミッシェルは、かろうじて銃殺刑にされずに南太平洋のカレドニアの島に流刑になったが、その船中での感慨である。——ルメル夫人の船酔いが多少落ち着いて気分もよい時をみて私は夫人に打ち明けた。どんな人間が政権についても、人間が弱いかに利己的である限り、罪を犯す以外のことは決して出来ないのだ。また献身的で精力的な人間が政権の座につけば彼らは打ち滅ぼされてしまうものだという考え方である。夫人は自分もそう考えていたと答えた——と。

わたしも年齢を重ね、歴史書を読みまた世界史上でもまれな激変の時代を見てきた経験から、ミッシェルが書いているのと同じ感慨をひそかにいだくようになっていたので、その感慨に深く共感する。その見方は経験則と言うことのできるものだ、と思う。

『パリ燃ゆ』は、最後の第六部巻末の章を「^{びん}壇の中の手紙」と題して締めくくる。そこには、「私はこの長い物語の筆を

お
摺く。主人公に当たるのは民衆であって無名の人々である」と、主題が明確に表明されている。続く文章には、「しかし、最初にシャルル・ドレクリュウズ（パリ・コミューン指導者として最終末にバリケードの上で撃たれた）のような名のあ
る個人のことから書き起こしたので、結尾も誰か一人の特定の人間を持って来ることにした。それはコミューンで誰よりも働いてよい筈^{はず}でいて、伝説の鉄仮面のように、生きながら隔離されコミューンの太陽から疎外されて了^{しま}ったオギュスト・ブランキの一通の書簡を紹介することで、筆を止めよう」とある。章のタイトル「^{びん}壇の中の手紙」は、1879 年にもまだ幽閉されていた革命家ブランキが G. クレマンソー（パリ・コミューンに同情的でヴェルサイユの政府との仲立ちをしようとして失敗）宛てに書いたその書簡をさす。

当時最も戦闘的な革命理論家であったブランキの言説は、いかにも先鋭である。150 年前のブランキのその書簡の文章は、ほとんどアジテーションのようにわたしには聞こえた。大佛は書く、「一世紀前近く昔のフランスの為に、と言うよりも現代の日本の社会にも関係するものがあるのではないか？」と。大佛にとって、その「^{びん}壇の中の手紙」は肯定的に傾聴すべきものと考えられたのである。つまり、『パリ燃ゆ』を書いていたころの大佛の政治思想はそういう方向へ変移していたと言えるだろう。

調べてみると、『パリ燃ゆ』は、1961 年から週刊誌『朝日

ジャーナル』に連載され始め、続編が雑誌『世界』に引き継がれ、1964 年末に朝日新聞社から出版された。それは、安保闘争やヴェトナム反戦運動などまだ政治的な熱気があった時代、現在の日本から見れば隔世の感のある時代に書かれたのである（思い出せば、田舎から都会に出て行った朴訥な少年には、当時高まりを見せていた革新的な思想を認識する力もなかった）。

この時代背景を知れば、『パリ燃ゆ』の奥にある大佛次郎という人の思想が見えるようにわたしには思える。この人は 1897 年の生まれという。1900 年以後の近代日本の戦争の時代を体験した大佛は、1960 年前後に積極的に発言した人たちよりも年齢的に上の世代に属す。政治学科で学び本を食べて生きてきて、自分の考え方を直接に小説に表現しない作家は、並の人にはないほど広く深く人間と社会を学んだにちがいない。目の前に展開する出来事を見るにつけ、自分の人間観と社会観を、造詣の深いフランスの、自分の体験した近代社会を決定づけたパリ・コミューンの時代を選んで、その社会での民衆を始めとする人間たちの生きざまをノンフィクションという文学形式で表現した、ととらえることができる。

この志向が次のノンフィクション大作『天皇の世紀』に引き継がれたのだ。それを読めば、こちらが、自分の生きている日本社会がどのように形成されたかについて、『パリ燃ゆ』に相当する作品として書かれた、ということが判る。

『天皇の世紀』は 1967 年から「朝日新聞」に連載されて

いたが、1973 年に大佛が亡くなったため中断された。単行本が出たのは 1974 年である。わたしが買ったのは 1977～1978 年に出た文庫本『天皇の世紀』17 巻である。第 1 巻にはわたしの好きな中野好夫の巻頭言が置かれている。中野は、「表題の天皇は明治天皇を意味するだろう、明治天皇の生誕でこの大作がはじまっているのを見ても分かる」と言っている。でも、この見方は『パリ燃ゆ』と『天皇の世紀』の関連への注意が足りない、と思う。実際、中野のことばのすぐうしろに、大佛が「『天皇の世紀』を明治百年に結びつけて考えて下さると間違えます」と言っていることが書かれている。

『パリ燃ゆ』がルイ＝ナポレオン・ボナパルト三世の四半世紀を語るのに対比すれば、『天皇の世紀』の「世紀」は文字どおりおよそ百年を意味するととらえる方がよいように思う。この見方では、『天皇の世紀』は、明治天皇に始まる近代の天皇制の百年を記述しようと意図していたということになる。1945 年の敗戦によって 1947 年に施行された日本国憲法では、天皇は主権を失い主権は国民にあるとされた。タイトル『天皇の世紀』はこの歴史事実をふまえている、とわたしは考える。

中野好夫の巻頭言にも、大佛のことば、「今日も残存している日本人の国民的性格が『天皇の世紀』を通じて描き出せたらと思うのみである。西郷も私だし、木戸も私である」が引用されている。大佛次郎には、安保闘争などの国民的な運動も下火になった 1960 年代の日本を歴史のなかに置いて全

体的に眺めて、そこに引き継がれている日本人の性格を描こうとする意図があったのである。『天皇の世紀』には、天皇や西郷や木戸だけでなく、東北地方の南部藩領から逃散した民衆などが描かれる。『パリ燃ゆ』と同じく、その世紀を生きたあらゆる階級の人々の生きざまが語られる。それが死によって中断されたことが惜しまれる。現代の日本人のために、誰か大佛のような人が『天皇の世紀』の未完の部分を書くべきだ、とわたしは思う。

こう書いていくと、こんどは大作『天皇の世紀』のことを考えるというたいへんな仕事になる。それをここで続けることはできないから、筆を擱こう。

2025 年 4 月穀雨

海蝶 谷川修

